

神の最も繊細な掟を踏みにじる者への天罰

およびイルミナティ共同体の不幸と悲惨

Greatchain

2017/11/20

飼っていた犬が、幼い姉妹の眠る部屋へ忍び込んだ 52 歳のペドファイル男のペニスを噛み切った、という恐ろしい話を、先日、翻訳紹介した。世の中には、これを何と悪趣味のエログロ話だと思う人も、たくさんいるであろう。そんな話はたとえ事実であっても、するものではない、と。私は全く逆の考え方をしている。目を覆いたくなるこの話に、目を覆ってはいらないと思う。

“ペドフィリア文化”と言われて、権力者のトップから、政府や、ハリウッドのような民間企業にまではびこっているこの犯罪を、見て見ぬふりをする事自体が、これを“文化”にしている要因であって、そんなものは存在しないと白を切るメディアは、明らかに共犯者である。官憲は、ローマ・カトリックと同じように、ペド犯に対して寛容であるために、民間人が代わりに立ち上がって、リンチで応じなければならない。その刑罰がいかに残虐であるかの例を、私はいくつか翻訳紹介した。一般の人々が、いかにこれを、天人ともに許せない重罪と考えているかを示す証拠である。

リンチが法的に許されないことは言うまでもない。今度の場合、人でなく、飼い犬が天罰を下す役目を果たした。これは人間によるリンチは全く意味が違う。犬は人間に近いとはいえ、あれこれ理屈をこねる人間とは違い、より宇宙大自然に近い存在である。その犬が、天の理法・秩序に悖る人間の行為を咎めて、恐ろしい天罰を与えたと考えられる。犬に刑罰は適用されない。これは犬が、天の理法を知っていたということ、犬を通じて、絶対的な天の怒りが人間に降ったと解釈しなければならない。人間が、神聖な性の秩序を軽蔑し、これ以上ないところまで自分勝手に振舞ったとき、ついに神の怒りが爆発したと考えねばならない。これがこの 52 歳のペド男の、いつまでも続く激痛であり、「生き方を変えよ」という神の厳命である。そしてこの激痛と厳命は、我々すべてに等しく与えられている。この事件は、全人類に公開すべきものとして起こったと私は解釈する。

この場合、少女（幼女）たちに被害はなかった。しかし今、地球上で大量に発生しているペ

ド被害者の子供たちの苦痛は、この加害者のそれ以上に大きいであろう。これも我々すべてに与えられた「世界苦」である。この天罰を「カルマ」と呼んでもいい。カルマとは、生まれ変わったあと前世の業を背負うことを言うが、「インスタント・カルマ」というデイヴィド・ウィルコックの言葉をここで借りてもよい。このような加害者と被害者の間の、耐えられない苦痛の永遠の交換であるカルマのことを、ここで教えられていると考えることができる。この連鎖を断つには、この宇宙的バランスの法則を知ることであるが、すでに起きてしまっているものに対しては、「許す」という手段しかない。もちろん、こんなことは私が言うのでなく、古今東西のすぐれた教師たちが、共通して言っていることである。許せるから許すのでない、「許せないものを許す」というこの行為が、この宇宙を一変させる、大きな解放をもたらすのだという。それはいつの時代もそうだった。しかし今この時が、そのための特別の試練の時だと解釈できる。でなければ、なぜ、こんな不自然な凶悪犯罪が流行するのかわからない。明らかにこれは、悪霊の働きによる憑依現象である。

「イルミナティ陰謀団の悪は、徹底的に暴き、徹底的に追求しなければならない。私はその戦いの先頭に立つ。しかし、いったん彼らが守勢に回ったとき、私は先頭に立って彼らを庇うだろう。イルミナティ家庭に生まれつくことが、どれだけ悲惨な苦しみであるかを知っているからだ」と言ったのは、デイヴィド・ウィルコックである。復讐をしてはいけない。復讐は神の領域で、人間のなすべきことでなく、それは人間の苦しみ（カルマ）を永続化させるだけだ、という理由はある。しかしその理由のほかに、イルミナティ家庭に生まれ育つことが、どれだけ不幸なことか知るならば、彼らをこれ以上苦しめることはできない、とウィルコックは言う。

彼らは神に反逆するルシファーを神としているために、悪をなすことしかできない不幸な者たちである。この掟に背く者は厳しい処罰を受ける。（こうしたことは Svali をはじめとする多くの“離脱者”の証言に明らかである。）我々にとって普遍的価値である「愛」というものは、彼らの間には存在せず、それは彼らを溶解させる毒薬のようなものである。「信なくば立たず」という我々の社会の「信」も、ここにはなく、誰であろうと、他者を信用するなど教えられ、逆に人を裏切ることのできる“強い”者が、優秀とされる。親友というものはそこには存在しないであろう。我々が魂の拠り所とする「真」も軽蔑され、騙すことが美德であり、嘘やプロパガンダが彼らの主要な戦略である。卑怯とか卑劣と我々が考え、軽蔑するような行動は、彼らにとっては、全くそういうものではない。暗殺は、ティッシュペーパーを使うようなものだと言われ、何の良心の呵責もなく人を殺す。そのように彼らは教育されている。

彼らは我々にとって、憎んでも憎み切れない怨敵である。しかし彼ら自身は、彼らの内部で、決して幸福なわけではない――。そういう事情を我々察すべきである。彼らは、我々に「気

づかせる」ための「触媒」として使われているという、Hidden Hand の観点を思い出すべきである。彼らは今、ますます追い詰められている。しかし彼らに復讐をしてはならない理屈がよくわかるであろう。復讐は神に任せるよりほかない——あの 2 人の幼女を救った、ブルドッグの与えた天罰のように。